



横幹連合の今までとこれから

横幹連合 副会長 江尻 正員*



日本の産業技術が再び世界の先端に躍り出るには、横型技術の振興による異分野融合が最重要課題ではないのか、産業界の一技術者としてそういう想いを抱いていたときに、計測自動制御学会の木村英紀先生と会談する機会があった。2001年秋のことである。当時私は日本ロボット学会の会長も務めていた。日本として横型技術の開拓に総力を発揮できるような新たな潮流を作りだそうという木村先生の熱意に感銘を受け、その年の暮に他の10学会の会長とも共同して「横断型研究開発を推進するための基盤整備の重要性」という提言書を纏め、国の総合科学技術会議に提出した。

これを端緒にその後何回かの設立準備会議を経て2003年に横幹連合が発足し、会長に吉川弘之先生をお迎えした。2005年には特定非営利活動法人としての認可を受け、木村先生と私とが、副会長として吉川会長を補佐してきた。現在では文理に跨る43の学会の連合（延べ会員6万人）として、他に類を見ないユニークな組織となり、その後も積極的な政策提言を展開してきている。

このように私は、産業界からの代表のような形でこの横幹連合の立上げに参画し、最近の3年間はその中枢で幾つかの重要施策の立案に携わってきた。

一つはこの雑誌「横幹」の発刊である。会員の自由闊達な主張の場として、組織の顔ともなる機関誌が是非欲しいとの想いから、脆弱な経済基盤の中で2年以上にわたる慎重な準備期間を経て、昨年ようやく発刊に踏み切った。まだ年2回の発行に過ぎないが、それでも横幹連合の新しい顔としての自前の機関誌が出来たことで、今後の横幹技術の展開にも大きな効果が期待できる。

二つ目は、横幹プロジェクトの立ち上げである。最近では単独の企業、単独の研究機関だけでは解決できない課題が多くなってきた。横幹プロジェクトは、そういう産業界が抱える難題について横幹連合が仲立ちをし、文系・理系に跨る複数研究機関の異分野研究者が、知恵を結集して解決しようとするものである。これは新しい産

学連携の枠組みを与えるものであり、すでにこの枠組みで幾つかのプロジェクトが成功裡に終了した。

三つ目は、これからの30～50年を俯瞰する横幹技術の将来構想の策定である。昨年度に経済産業省からの支援を得て、会員学会からの専門家による異分野間での徹底した議論が展開された。その成果は報告書「学会横断型アカデミックロードマップ」として纏められ、近々経済産業省から発行される予定である。これは我が国で初めての学会横断型アカデミック・ロードマップでもあり、横幹連合ひいては日本の科学技術にとって、将来に向けた新たな道標となることが期待される。

これらの例のように、横幹連合はその発足以来、試行錯誤を繰り返しながらも組織としての基礎体力作りに努めてきた。この間、各方面からいろんな批判も頂戴した。とくに産業界からは、立派なことを言っているが実行に結びついていないとか、イノベーションに結びつく新たな提言がないとか、多くの新概念・新手法の創出は皆海外からではないか、などである。

しかし大きな勘違いもありそうである。イノベーションの主体は産業界であり、そこで役立つ新概念・新手法は、海外では産業界が自ら生み出している例が多い。横幹連合の活動の本質は科学技術の構造を変えることにあり、手弁当のボランティアを基本とする「学会活動」としての限界もあるので、短期的な成果を性急に求めるのは必ずしもいいこととは限らない。産業界の一先輩技術者としては、もう少し長期的視野で見守れるような、度量の深い産業界を再度期待したい気持もある。

とは言いつつも、そういう社会からの批判や期待に確実に応えるには、やはり「実践」が重要となる。横幹連合の理念、さらには長野宣言・京都宣言の確実な実践である。知の統合手法とその学問体系の確立、それらを通じての産業イノベーションに向けた先導的役割の発揮、さらには自然科学・社会科学の成果を結集して実証的で予見的な社会デザインの方法論を確立することが重要となる。横幹連合は今後も常に変革を目指し、自らをも変貌させつつ、世の中に役立つ横幹技術の深耕と新たな潮流作りに努力して行きたいものである。

*産業技術コンサルタント、工学博士。元 日立製作所 技師長（中央研究所 兼 機械研究所）。